

2020年は新型コロナウイルスに世界が震撼した年として人々に記憶され歴史に刻み込まれた。山ヤの私にとっては医療現場の混乱を見れば山へ行きたしと思えど外出自粛はやむを得ず、心の葛藤が続く毎日だった。「行くべきか行かざるべきか。To be or not to be. That is the question!」ハムレットの心境ぞ如何に？ 「山は逃げない」と言われるが、心臓と膝に爆弾抱え、運転免許証の返上も考えねばならないポンコツの身に来年大丈夫と云う保証はないのだ。6月半ばの外出自粛解禁の報を得て、雨の合間を縫い出かけてきたので以下報告したい。

※後半の2編は、焼石岳と蔵王山の報告であるが、本年の夏山山行として此处に併載した。

■7月2日（木） 谷川岳周回コース 単独行

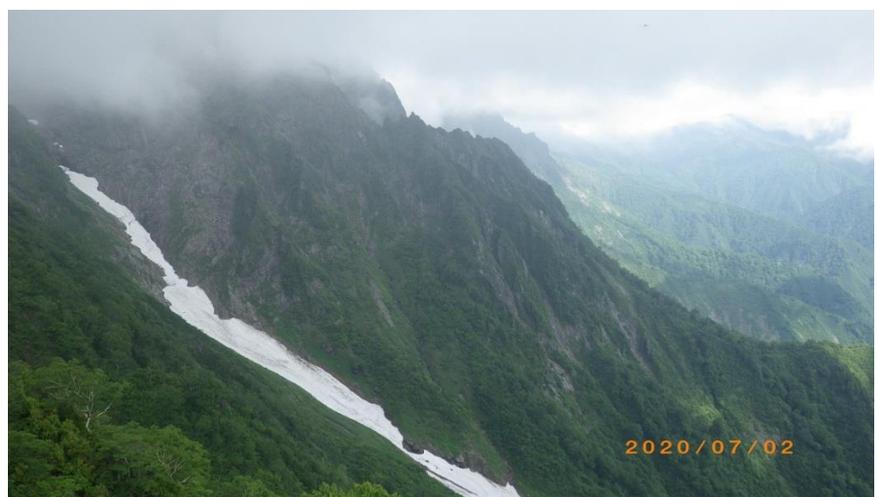
居住地の関係から谷川連峰は我が登山の原点。縦走、雪山、岩、沢、雪訓と憩いの山であり修練の山であり気軽に行ける懐深く近くて良い山、単純にトマの耳だけに関すれば今回は49回目の頂上となる。本コースは94年4月末に肩の小屋一泊で蓬峠へ抜け土樽に下った事があるが、土合へ回るのは初めてで一度はやらねばと長年の我が課題であり、蓬峠でのビバークを頭の片隅に置きつつ歩程20^キをまずは1日での一気通貫を目指す。

前日に苗場の小舎に泊り早寝、朝一番に出る。土合駅を過ぎ遭難者慰霊碑の駐車スペースに車を停めた。帰りの事を考えるとここが最適だろう。この十数年はもっぱらロープウエーを利用して天神平から登る事が多くなり、西黒尾根は4年ぶりだ。登山口を6時丁度出発。青空も見え蒸し暑く、まずはジグザクと続く樹林帯の急登に高圧線鉄塔までの20分で一絞り汗をかく。

谷川岳に最初に登ったのは59年秋、高校2年生の時で山岳部「谷川岳集中登山計画」の偵察山行に参加させてもらった。部活はバスケ部だったが、山が好きになり山岳部の部室に出入りし誘われた。当時はまだ天神平ロープウエーはなく西黒尾根か巖剛新道を辿るのが一般的で、トマの耳までは登山口から3時間半位が目安であり、高圧線鉄塔までは15分と計算していたもので、今日の20分はかかり過ぎだがまあしょうがない。

送電線をくぐり抜けた先から尾根道となるが、見通しは効かず唯ひたすら登り続けるのみ、やがて低い灌木帯になり8:10最初の岩場に達し漸く展望が開け天神平が指呼の間となった。ロープウエーはまだ運行前という事もあってか西黒尾根コースは思ったより人出は多く、老若男女皆さんお元気だ。

その先は岩場の連続となり鎖を頼りにラクダの背と呼ばれる開けた小ピークに8:55到着。若い頃は2時間強だったのに2時間55分もかかったがこれ位は想定内である。天気は下り坂のようで頂上はガスっていて見えないが東尾根・シンセン岩稜と残雪を抱くマチガ沢の展望が開けて一息入る。



(ガレ沢のコルよりマチガ沢とシンセン岩稜)

コブを下った鞍部がガレ沢のコルで、58年前に今は廃道となっている西黒沢～ガレ沢を辿り登った事があり、そこには景雪避難小屋が建っていたが今はもう跡形もない。コルから見上げる尾根は急峻で今までは序章に過ぎずこれからが本コースの核心部、すっぽりとガスで覆われて頂上が見えないのは残念だが梅雨の最中を思えばマチガ沢の雪渓が見えるだけでもヨシとする。だんだんとお花が顔を出し始め、天神尾根コースではもう見る事の出来ないホソバヒナウスユキソウともご対面が叶い、他にもミネウスユキソウ、ウサギギク、ハクサンチドリ、ハクサンフウロ等々つつい足が止まってカメラが忙しい。



(ホソバヒナウスユキソウ)



(ヨツバシオガマ)

ザンゲ岩を過ぎ残雪のトラバースを抜けると肩の広場の一角に出て、間もなくして11:05 トマの耳頂上に達した。49回目の頂上、登山口から5時間05分は25年前に比べると1時間半も遅く想定内とはいえ78歳という現実を突き付けられ苦笑するしかない。

多くの先客が憩う頂上に長居は出来ずそそくさと昼食済ませ先を急いだが、オキの耳を過ぎると途端に人が少なくなり、富士浅間神社奥宮に達するとポツンと雨も落



(49回目のトマの耳頂上)

ちてきて「さあどうしよう!? 行くべきか、行かざるべきか」ハムレットがここでも出てきて弱気の虫に大いに悩む。大雨降らせる積乱雲ではなくすぐにも晴れ間が見えてきそうな乳白色のガスの流れに去就を迷っていると、若者が一人下ってきたので、どこまで行くのか聞いたところ茂倉岳まで行って引き返すという答えに勇気をもらい予定通り前に進む事にした。

このルートを辿るのはこれが7回目、茂倉岳までは名にし負う一ノ倉沢の大岩壁を眼下に360度の大展望が広がる快適な縦走コースなのだが、折角の「ノゾキ」も濃霧の中で何も見えない。ここで若い女性の単独行者とすれ違った。縦走装備で白毛門から来たと言う。朝土合を出たのだろうか?いくら健脚でもそんなの無理か、とすれば清水峠で一泊したのか?難聴の度合いが進行し聞き取りにくく、迷惑そうな様子もみえて途中で質問を打ち切ってしまったが、その後ずっと気になって仕方なかった。ともあれ元気な女の子と出会って挫けそうな心に気合が入り、一ノ倉岳までの高度差130mを一気に突き上げる急登、顔をしかめ苦しみながらも何とか1時前にドラム缶式避難小屋の設置された一ノ倉岳頂上に着いた。オキの耳から1時間20分は上出来と言うもの、これなら何とか明るい内に土合に戻れそうと希望が湧いてきた。

ここから中芝新道を下るコースは土合駅へのショートカットだが今は廃道になっていて使えない。96年10月と97年6月の2度登った事があるが、当時でも相当荒れていて道迷いした覚えがあり、頂上の指導標にも「熟達者向き」との表示の他「一般登山者は利用禁止」との張り紙もあった。

その先茂倉岳まではホンのわずか、キツイ登りもなく平坦で歩き易く、静かな散策が楽しめる気持ち良い稜線ルートだが、視界は数十mのみ。ここで浅間神社奥宮で先行された若者とすれ違った。思った程には遅れてはなかったようでホッとす。茂倉岳頂上には1時15分着。



(一ノ倉岳頂上・中芝新道の標識)

次の選択肢は予定通り蓬峠へ進む、土樽駅に直接下る、谷川岳に引返す、の3択だが、一番キツイのが蓬峠→土合コース、

瞬時迷うも雨は大丈夫とみてこれはラストチャンスだからと予定通りに蓬峠へと進むことにした。結果的にはこれで良かったのだが、笹原に出るとすぐに霧雨に包み込まれ天気を読み違えたかと焦った。目指す武能岳が見えない中、安川茂雄が「霧シオン」と呼ぶ小雨「谷川岳の霧と星」(三笠書房)にたちまち眼鏡は曇り、腰まで来る笹藪にびしょり濡れて気が萎えてくる。

長かった。武能岳までも長かったがその先蓬峠を経て土合までも長かった。3:50 蓬峠着。蓬峠は50~60年代にかけ初冬の初滑り、春山スキー、春から秋までは花と紅葉のハイキングコースとして賑わっていたが、今は訪れる人はわずかだ。無雪期の土合側が峠直下のガレ場が崩壊しハイキング気分では危険すぎるのがその一因だろう。

峠での雨中ビバークは考えられず一気に土合へ下る事にする。昨年9月土樽から蓬峠～土合を歩いた時は3時間程で下っているの、逆算し7時過ぎには土合橋まで出られるだろうと先を急ぐ。とにかく明るい内に武能沢の渡渉を済ませ、虹芝寮に着ければ後は何とかかなと思った。危惧した数カ所のガレ場は想定以上に荒廃し濡れて滑り易く、まさに命がけでの脱出騒ぎ、五感研ぎ澄まし慎重に下ったが、12時間近い行動で疲労も限界に近く1年前は走り下った白樺小屋から武能沢までのブナ林の九十九折れの道も、なかなか思うように足が進まないのだった。ブナ林の中で雨はあがり 19:40 遭難慰霊碑駐車場に無事到着、もう真っ暗でヤレヤレだった。所要時間14時間。蓬峠から3時間50分もかかっており、このタイムには少々不満が残っている。

《コースタイム》

遭難者慰霊碑 PA5 : 40-6 : 00 西黒尾根登山口—8 : 55 ラクダの背—11 : 05 トマの耳 11 : 15
—11 : 30 オキの耳—12 : 55 一ノ倉岳—13 : 15 茂倉岳—15 : 10 武能岳—15 : 50 蓬峠—
18 : 30 虹芝寮—19 : 40 遭難者慰霊碑 PA

■8月3日(月)～4日(火) 焼石岳 (1548m)

◎メンバー：赤澤他1名(妻)

知遇を得ている白山書房の社長簗浦登美雄氏は昭和40年代谷川岳・一ノ倉沢や海谷山塊の岩場で名を馳せた知る人ぞ知る名クライマーだが、彼が東北の山で一番のお気に入り焼石岳だと云う。かれこれ20年近く前にその名を刷り込まされ、以来いつかは行かねばとずっと気になっていたが、今夏は計画していた北アルプスが新型コロナウイルスの影響で行き難くなってしまい、それではこの際に長年の胸のつかえを下す事にした。

行きそびれていたのはやはり遠距離である事が一番の理由。1日目は移動日で国道397号線沿いの「ツブ沼キャンプ場」にテントを張る。キャンプ場は無料、広い敷地に客は私達だけで、近くには入浴施設「ひめかゆ温泉」があり良い所だ。

4日(火)4時前に起床し、国道397号線を少し戻り尿前橋より中沼林道へ向かう。尚、この尿前(しとまえ)は、松尾芭蕉・奥の細道で有名な「蚤虱 馬の尿する 枕元」の尿前と間違え易いが、そちらは鳴子温泉近くの国道47号線沿いの「尿前の関」であるそうなる。

中沼林道は普通車にはやや荷が重い道路で往路と復路で各1回凸凹の中でガリッと底を擦ってしまい4駆だったらなあと思ったものだ。

約7kmを40分。トイレもあり、登山口の先に水も流れていて良い駐車場で先行車が2台停まっていた。入口の登山ノートに記帳し5:50出発する。2日前の雨の影響か、ぐちゃぐちゃに濡れた樹林帯の中は暗く、毒虫も飛びかう不快な山道を登る事40分で中沼に出た。正面に焼石連峰が見えているが山座同定は難しい。沼に沿ってぬかるみの道を行けば上沼で湿原は黄色いトウゲブキの群落で、あまり可憐な花でもなくカメラを向ける気にならない。木道が敷設されており熊の糞が落ちていた。雨に当たってぐちゃぐちゃに崩れているが、そんなに古いものではなさそうだ。その後も三ヶ所程出てきて、周辺が熊のテリトリーである事を認識し、出会わぬ事を祈るばかりである。

歩き出して2時間で銀明水に出た。この水は美味しかった。南ア・仙水小屋、西吾妻・新高湯温泉、八甲田山・仙人岱等の名水を思い出す。9:20姥石平に出て、ここで漸く焼石岳が確認出来た。それまではずっと左手に見えていた横岳をてっきり焼石岳だとばかり思っていたものだ。この辺りから景色も開けてきて、足元はハクサンフウロ、ハクサンイチゲ、クルマユリ等咲き競うお花畑となり東北の山らしくなる。



(ツブ沼キャンプ場)



(ハクサンフウロ)



(ウスユキソウ)



(タテヤマリンドウ)

9:50 焼石岳頂上着。日差しが強く蒸し暑い。風があり、汗を引込ませてくれるのが有難い。

存分に久恋の山を堪能し、滑り易い下り道に気を付けて慎重に下山にかかった。

(焼石岳頂上⇒)

コロナ騒ぎの続く中、出会った登山者は17~8名だったが、登山口近くになっ



て全員 70 歳代と思われる 7 人組（男 4、女 3）とすれ違った。大きな荷物を背負い今夜は銀明水避難小屋に泊るという。「密」にならなければいいがと余計な心配もさることながら、この山の良さは山の中に泊ってこそ真価が解るのかも少し羨ましかった。所要時間：7 時間 20 分

《コースタイム》

中沼登山口 5：50—7：55 銀明水 8：05—9：20 姥石平—9：50 焼石岳 10：10—11：25 銀明水—13：10 中沼登山口

■8 月 5 日（水） 蔵王山（1841m）

◎メンバー：赤澤他 1 名（妻）

せっかく東北迄足を伸ばしたのに、焼石岳 1 つで帰るのではもったいないので、白石蔵王まで戻り駅前のビジネスホテルに泊り蔵王に立ち寄る事にした。足弱組の秋山行の下見だ。

21 年ぶりの熊野岳は濃霧の中、等間隔で並ぶポールにルートを導かれ、往路では顔を見せてくれなかった御釜も最後には全貌を露わにしてくれ、高山の雰囲気を味わう事ができた。刈田岳（1758m）に立ち寄っても往復 2 時間、これなら 80 歳超えた先輩達でも楽勝に違いないだろう。観光客が多く駐車場は満杯近かった。



（全貌を見せてくれた蔵王山お釜）

（了）

追記：帰宅後ネットを覗き「シニア女子の悠々登山 blog」を見つけた。昨年 7 月島根県から男 7、女 8 の計 15 名で谷川岳周回コースを辿った記録なのだが、1 日目は天神平から肩の小屋泊、2 日目は肩の小屋から蓬峠まで 10 時間もかかり、土合へ下るガレ場で 1 人転落事故を起し途中ビバークしたらしい。

このコースは平均年齢 77 歳の年寄りが団体で辿るには相当にシンドイです。